富田御殿について

清木　素

徳山藩七代就馴（なじ）は寛延三年（一七五〇）十一月六日、江戸に生まれ、明和元年（一七六四）遺封をついで就馴と改称した。明和四年従五位下に叙し、大和守に任じ、天明元年（一七八一）石見守に任じた。

藩政をとること三十四年に及び、よく下情に通じて庶民を愛し、家老奈古屋蔵人を重用して庶政に治績をあげた。

各家伝来の古文書や系譜を提出させ、初代就隆・三代元次の詩文を集めて整理するなど文化高揚のために大いに意を用いた。

天明五年（一七八五）には鳴鳳館を創設して教育振興の礎をきずいた。

寛政九年（一七九七）九月家督を広鎮にゆずり、左兵衛の佐と改名した。

文化元年（一八〇四）には富田に別邸を設立し、庶民の文化高揚の気風を培い、富田御殿を中心として、あらゆる文化

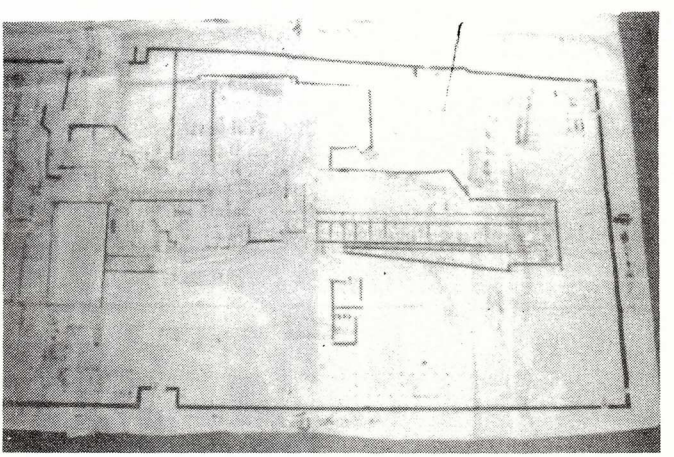


写真１

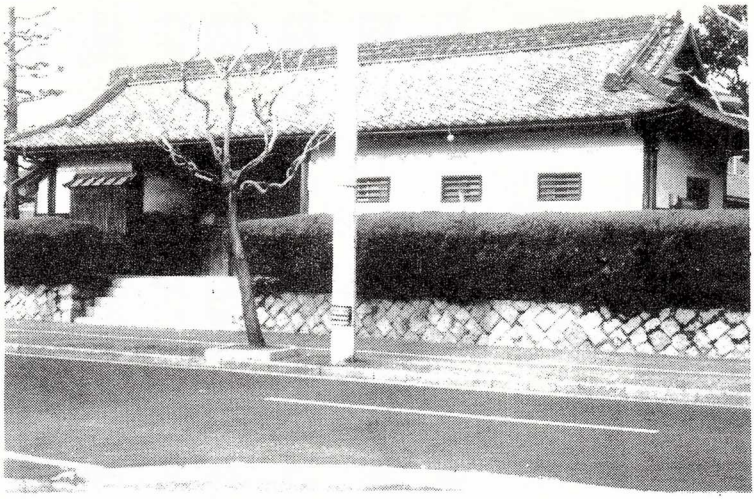


写真2

の華を咲かせた。文政十一年（一八二八）に七十九才で卒するまで二十四年間富田の殿様として庶民に親まれた。

富田御殿が竣工するまで、土井の四熊家を假御殿として使用され、徳山市史・南陽町誌にも富田假御殿の絵図が載せられていた。

この度富田平野の林崇文家より富田御殿の総図面が見つかり、（資料1）（写真1）にあるように、御殿御本門は東側東向であることが判明した。

御殿東側には水路と道路が今も残存し、この道が政所より鹿野行の最初の道であった。山陽道とこの路と交又点の所に昔、「ここより北へ三里龍文寺あり」との道しるべがあったと言い伝えられている。北九州よりの参勤交代の殿様がここでかごから下り、北の方龍文寺を拝んだという。鎮西の吉祥山といわれるほど寺格の高い寺であったことがうなずかれる。

後に富田御殿の西側裏門の西に鹿野街道が出来、現在の富田・鹿野線は更に西に移ったものである。

藩の画家朝倉南陵（光世・宗林軒南陵）は谷文晁に学び、文政元年には禄高二十五石をもって中小姓格となり、同八年に永代中小姓格に進んだ。

文化元年、就馴公に富田御殿において仕え、文化三年には測量方御絵図幷其外御用係を仰せつけられる。文化七年には

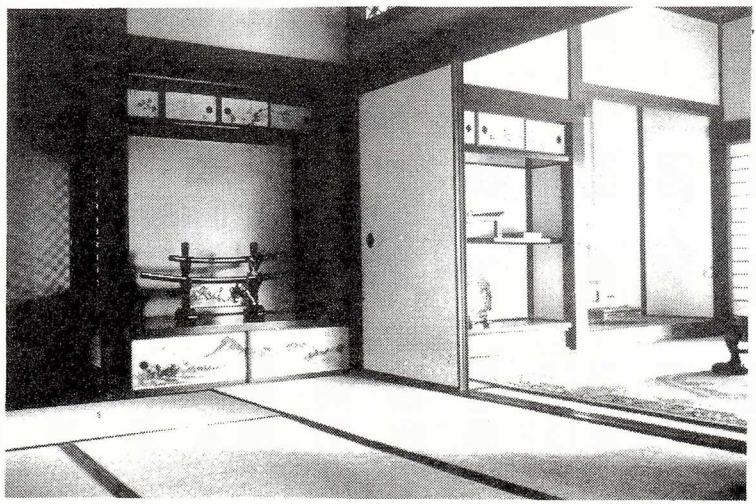


写真3

御年賀の時御紋つきの御羽織を頂戴している。

文化八年頃から南陵は別して富田御殿への御召しが多くなった。（資料2）

文化十二年から南陵震陵父子とも富田御殿に召し出されるようになった。徳山・新南陽地方には数多くの名作を残している。

文化元年に設けられた富田御殿が文政十一年まで茶の木原を中心として徳山地方文化の中心的役割を演じていたといっても過言ではない。

御殿の遺構

(一) 佐藤家の長屋門（徳山市体育館東前）（写真2）

これは富田御殿の用人格にあった佐藤喜内の実娘がよく就馴公の面倒を見てくれたというので、形見として御殿の仲間部屋付の門を貰って移したのがこの門で、一部二階平屋建の豪華なこの門も転々と人手に渡り、荒れ放題となっていたものの、市内では一番の名門で当時をしのばせる。

(二) 新南陽市平野林崇文家の二間（写真3）

林家の線路側の二間はもと富田御殿の一部を移築したものという。

天井の梁が上座に向って垂直に走っていることも御殿用の証拠を物語っているという。

資料1

就馴公御隠居所富田御殿御普請之事

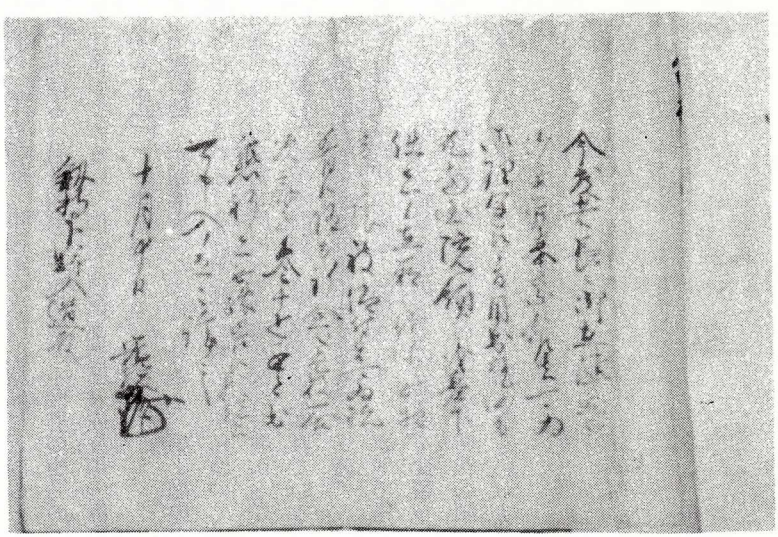
一文化元年甲子就馴公御住居所富田茶木原江（御屋敷御裏門ハ土井与政所江之往来道東側西向ニ有之御本門ハ東側東向也）御造営二月七日御移徒、去亥五月朔日御新初、九月廿七日御上棟、十二月廿六日御家堅常祷院執行之、御入費米四拾一石一斗一升二合八勺金一両一歩銀百三拾九貫三百四十二匁二分二厘三毛（普請都合役山田仁右衛門検使役今津平八算用役伊ケ崎彦次郎大工方御用掛佐藤勘左衛門伊藤弥五郎勤）

（『徳山市史史料』上）

資料2

一文政十一年戊子七月十二日三尊并十六羅漢像掛物都合十九幡、富田御殿御納戸料之内ニ而調被仰付、隆興院殿御逝去砌御寄附外点眼料トメ銀二枚寺納（画絹地表装茶純子風帯一文字金欄軸金滅金御紋付桐箱入朋黄真田紐付上箱小長持ニ入之画工朝倉南陵光世同人倅牧太直逞両人ニ而認之。

（『徳山市史史料』上）



剱持家文書

P.31参照